

インタビュアー) 以上は、その時点までのあなたがどう精神分析を発見したのか、ですね。

マルヴァル) そうです。

次に、とりわけ自分にとり刻み込まれた出会いについて、お話しします。臨床的な出会いと、大学での出会いです。ふたつの出会いはとりわけ自分に、自分の分析の行程、そしてやはり人生に、刻み込まれていますね。それから第三の出会いもあります。

最初の出会いは、やはり一番大事なものです。たぶん 1975 年だったと思うのですが、ラカンとの出会いになります。最初コントロール（スーパービジョン）で会って、それは分析にかわりました。そして分析が終わると、またコントロールにかわりました。従って私はラカンに会っていたのですが、ローランス・バタイユにコントロールを引き受けるひとにも会いたいと言っていました。最初私はオードワールに会っていました。ラカンは、フロイトの概念はそれで十分と言っていました。

1977 年だったか、78 年か、私はラカンはフロイトであるだけでなく、彼よりも先に行こうとしているのだと、理解しはじめていました。あと私はオードワールにはがっかりしていました。それでバタイユに「オードワールを信頼できません」と伝えたのです。

すると、ローランス・バタイユは、「じゃあ信頼できるひとに会いに行きなさい」と言ってきました。思い出すのですが、こんなふうに、自然に、「ああ、ひとりいるんです」と答えたのです。そんなふうにラカンに会いに行ったわけです。最も重要な出会いは、ラカンとの出会いなのです。

短時間セッションあるいは時間変動制のセッションは、2 分から 20 分くらいのものですが、そのおかげで私は、体験的に、分析とは知性化の作業ではないのだな、無意識とは隠された意識のことではない、ヒッチコックのようなトラウマで養われているものでもないなど、理解できました。

無意識はむしろ、散り散りの要素からなるひとつの審級で、言い間違いや、失策行為、夢などで驚きとともに出現します。それこそ短時間セッションが生み出したもので、何か少し驚きの出現だったり、しばしばセッション外で起こることで、それらの手段をもって抑圧が取りのけられることで生じます。それは本当に・・・。

ローランス・バタイユはもっと長い分数のセッションを実践していました。彼女は分析の実践をそれほどしていなかったし、時間としては長いものでした。いっぽうでラカンは、かなり印象的でしたね。最初 20 分のセッションでしたが、私がどこから来たかなど話したと思います。二回目は 2 分のセッションとなり、私は破滅的な思いで外にでました（笑）。

でもよいのです。後になってから、彼の分析の概念に結び付いているとわかりました。知性化すること

が肝心なのではなくて、肝心なのは想像的なものから解き放たれることなのです。

そういうわけで、ローランス・バタイユとの分析は少し滑っていたと思います。とは言え、2年か、2年半やって、彼女のおかげで、一番自分を困らせていた症状は、なくなりました。

彼女との分析はその後、ラカンの短時間セッションに置き換わって、私のなかに探求と、書く欲望を解き放ってくれました。この欲望はいまなお活発であることをやめていません。

ラカンと出会ったおかげで、書く活動をつねに私はしてきました。というのは、それは私の症状だからです。ですから精神分析はその無意識を解消しませんが、症状を住まわせることを可能にしてくれるし、それとともにやっていくことを可能にしてくれます。それが明らかにするのは、私たちは自分が知らないものごとによって導かれていることで、それには反復のなかでしか出会わないということです。

自分の症状を変えることはできません。しかし症状にたいして、違ったふうにむきあうことが可能になります。その症状でもう苦しむことがなくなったり、私たちの欲望にそれを従わせることができるようになるのです。

ラカンはつねに温かいひとだと私には思えましたが、すべてにたいしてそうだったわけではありません。彼はタブーを破ることについては引き下がらない分析家であり、思いがけないものがふいに生じることに對して、障害物を作ることもしませんでした。たとえばよくそう思われているように解釈においてつねに効果があったのではないと思いますが、むしろ驚くような区切りや介入というものがあって、さらには、それらは胸を打つものでしたね。言葉の本来の意味で、胸を打つものでした。

彼はフロイトの枠組みを持ちながらも、大きな自由というものを生みだしました。とりわけいくつかの解釈のことを覚えています。それらのうちいくつかは目撃しましたし、残りのものは人から聞いたものですが。

そのうちのひとつは、こうです。ある分析主体の口から葉巻を取り上げました。その分析主体は慎ましさにかける者で、こんなふうに、葉巻を手にしながらか、ラカンと会っていたのです。その分析主体のことを知っているのです、私には彼がそうしたのを理解できます。しかも、分析主体本人が私にそれを教えてくれたのです。

二つ目の解釈というのは、こうです。ラカンが分析主体の頬をほぼほぼ叩いたというものです。これもそのひと本人から聞きましたが理由は言いませんでした。でもそれは彼にとって何の妨げにもなりませんでしたし、逆にその人はのちにエコールの分析家（AE）にまでなりましたよ。

三つ目の解釈というのは、こうです。私はその目撃証人なのですが、ひとりの分析主体にたいしてラカンは叫んでいました。その人のセッションの後、ラカンは人の沢山いる待合室まで彼の付き添いをしな

がら、「あなたは馬鹿者だ！」「ほんとにあなたは馬鹿者だ！」と怒鳴っていました。

ちょっと驚きですけども、でもその分析主体にとっては色々考える機会になったと思います。というのは明らかに彼は、こうなんと言うか、とても自分に酔っている人物だったからです。

私自身になされた、一番胸をうった解釈は、私の享樂の原則に狙いを定めた解釈でした。私が書いた記事を渡すとラカンは受けとってくれて、私は彼に最初の本を捧げています。彼に受け入れてくれるのか訊いたのですが、持って行ったテキストを、彼は受け取りました。多くの場合、何も言わずに受け取ってくれたのです。

ある日、セッションのはじめに、かなり長めの記事を持って行きました。非常に野心的な題名のものでした。彼は最初のページを見て、それからこんなふうに、記事を親指と人差し指で繊細にはさんで持ちました。少しのあいだそうしていました。その後、彼は演劇的な仕方で、テキストを地面に落としたのです。それは自己愛的なものから、書かれた物を引き離す、ひとつのやり方です。決定的な享樂の対象を指し示しているのです。私はその解釈に胸を打たれました。あなたもとてもよく分かっていると思いますが。

それからまたべつのお会いがあり、それは決定的なものでした。

70年代のはじめ、EFP（精神分析家団体）のセミナーに参加したことがあります。そこで私はラカンのテキストのなかでもっとも複雑なテキストのひとつである『主体の転覆と欲望の弁証法』の注釈を聞いたのです。とても難しいテキストです。

ナンテールの哲学科の教員がいて、エクリのテキストを手にしていました。教師になりたてのことでした。その教員は大したことを理解していませんでした。彼の学生たちも似たようなものでした。

そしてその晩、このテキストについての、心がうち震えるような注釈を聞いたのです。一行ずつ、素晴らしい注釈がなされていました。本当にそれは難しい曖昧模糊としたテキストなのですが。そこで聞いたことが、本当にラカンの教育に対して私を変えてくれたものだったのです。ラカンは最初、私をいらいらさせるものでした。どうしてラカンはこんなふうを書くのだろうかと思っていました。彼が思うことをもっとシンプルに書かないのだろうかといぶかしく思っていました。

でもそのとき、私は本当に分かったのです。彼の考えは極端なまでに厳密なのだと。そして本当にそのことが決定的でした。その注釈はまだ若い、分析の養成段階のある男性によってなされているものでした。それがジャック＝アラン・ミレールです。ですからこうして、彼は私にこの晩、ラカンは理解できないものではないこと、ラカンは馬鹿者ではないばかりか、ラカンが厳密なひとで、革新的な人間であることを、理解させてくれたのです。

この時ジャック＝アラン・ミレールが生んだ読解、それはずっと続けられています。彼はセミネールを

していて、そのセミナーのおかげで、分析の色々な世代の人たちが、難しいラカンの教育内容の突破口を見つけることが出来ています。とりわけそれらの注釈がなければ接近するのがかなり難しいようなものに対して、講義がされています。

私が感じているところでは、ラカンは暖かい人物でした。ジャック＝アラン・ミレールは確実により冷たい人物です（笑）。しかし両者との出会いは自分にとっては決定的でした。彼らは二人とも、私の分析行程において、シンパシーをもって、私に寄り添ってくれました。精神分析への転移は、おそらく決定的ないくつかの出会いというものがなければ、維持できないでしょう。そこから、分析を拡大していくこと、つまりキャビネから出ることの重要性が生まれると思います。私は 1970 年から 77 年に EFP に入っていて、EFP のメンバーでした。

そして 1980 年の学派分裂が起こったときには、ラカンは自分についてくる人にたいして呼びかけを行いました。私は返答したのです。彼に答えた 1000 人がいましたよ。私はその時答えました。私は ECF の初期のメンバーですね。そのときに私は JAM（ジャック＝アラン・ミレール）に従ったわけです。そして今もなお ECF にとどまっています。いくつかのその後の分裂については残念な気持ちがあるとしても、とどまっております。

ですから JAM はラカンを読むのに非常に助けになりました。彼は私が感謝を捧げている幾人かのうちの稀なひとりになります。というのは、精神分析に方向づけられた臨床心理の局を、フランスの大学に組み込むために、寄与してくれたからです。フランスの大学は、今日もそれが確認できますが、ほとんど精神分析のオリエンテーションをもつ臨床心理学を受け入れることに対して、前向きではありませんからね。

むしろ大学に分析家たちを入れるのは、今日いっそう難しいとさえ言えるでしょうね。そう聞いています。ああ、あなたも大学の人でしたよね。・・・ときおり言いたくなるのです。・・・でもやはり、あなたはその方面の分析家です。少しそうです。純粋な臨床家のなかにいます。・・・

JAM はこの考えをもっていませんでした。とはいえ彼自身は大学の人でもありました。でも、人は決して彼にたいして大学人であると非難はしません。というのは、彼はラカンの注釈者と見做されているからです。だから彼はそう見られないけれども、ある種の人たちには、「大学の人」というラベルが）肌に貼られているのです。

いいでしょう。私はそれに慣れましたよ。大したことではありません。でも少しいらいらしますが。では三つ目の重要な出会いについて話します。それは勿論妻のことです（笑）。優秀なノルマル出身者で、英語の教授資格を持っています。ルイス・キャロルが専門です。出会った時、彼女は若くてかわいかったです。精神分析について共通の関心があって、お互い出会いました。その関心というのはいまも養われています。というのは、彼女はいま第 8 大学精神分析学部の学部長をしているからです。第 8 大学精神分析学部はラカンが 1984 年にヴァンセンヌに創立しました。彼女はジェラール・ミレールのあと着任

しました。

彼女と私のディスカッションの様子が、お互いのスーパービジョンに類似することも稀ではありません。そして噂とは違って・・・というのはよくそれを聞くからですが・・・、私たちは年の差はありますが、彼女は決して私の学生だったことはありませんし、私の分析主体だったこともありませんでした。

インタビュアー) いずれにせよ、あなたたちは共通の興味があって、出会ったのですね。

マルヴァル) そうですが、それは偶然ではありません。この種の出会い、こんな感じの出会いは決してうまく行きません。精神分析に興味をもつひとりの友人男性がいたおかげで、彼は少しばかり有名な哲学者ですが、ミゲルという男で、彼が、私たちふたりは互いのために作られているという考えをもってくれたのです。

インタビュアー) 分かりました。

マルヴァル) あのやり方は決してうまくいきません。彼が私たちを出会わせたので、それでうまく行きました。重要な三つの出会いについて、以上が、私が言えることです。(4につづく)